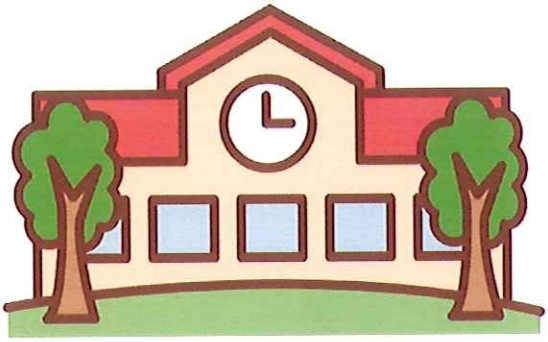
下記の文は、私の幼少時代を中心にふるさとのできごとや光景を葉書一枚におさまるようにまとめてあります。只今、２７６号に達しています。東京を中心にしてめまぐるしく変貌してきた日本ですが、田舎ではこうした変化や政策の転換期に追いつけずいろんなひずみが生じていました。

●№270【中学校裏の松林に捨てていた（現在の北側道路沿いの建物付近）】

窪田　巧

またまた人糞の話です。戦後、GHQは日本政府に人糞肥料の中止を命じました。しかし、この命令は地方まで浸透しませんでした。十年経っても、肥やしとして使っていたのです。便壺から肥溜めに移す光景がよく見られましたが、肥溜めの中で人糞は発酵してよい肥やしとなったのだそうな。先人は発酵の効能を知っていたのですね。
昭和三十七年頃になると、さすがに人糞はまずいわなという考えが広まってきたのでしょう。こんな珍事があったのを覚えていますか？市の財政難によるものなのか、地元の中学校では、生徒用便所から北側の松林に肥桶で運んで捨てていました。団塊の世代までは清掃時間にこうした当番があって、生徒は大騒ぎしながら渋々肥桶を担ぎました。捨てた跡？モダンな肥えた校舎が生え並んでいます。
現在の自治体では終末処理場で固形分と水分とに分けて処理しているのだそうな。さらに進んで、固形分を発酵させて、ガスは熱利用に、発酵した物を生ゴミと混ぜ堆肥にしているのだとか。
究極的には、昔同様、人糞は発酵させて肥やしになるのが地球にとって無難なのでしょうね。